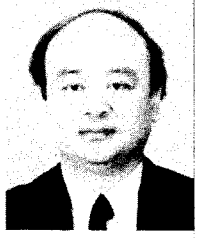
ジャーナリストからの直言

医療における「希望」と「誠実さ」
――「白い巨塔」ブームが問うこと



毎日新聞大阪本社 論説委員
池田 知隆

関西地区の瞬間最高の視聴率は45・7％――今年3月、フジテレビ系（関西テレビ）で放送されたドラマ「白い巨塔」（山崎豊子原作）の最終回の視聴率に驚かされた（関東地区の瞬間最高は36・9％、ビデオリサーチ調べ）。浪速大学の天才外科医・財前五郎教授（唐沢寿明）を主人公に、医学界の知られざる実態と生命の尊厳を描いたドラマだ。入院中の患者が、消灯時間を過ぎても熱心に見ている、と病院関係者からよく聞かされた。このドラマはもう何度も映像化されているが、医学界とその内部の人間模様にはあまり変わりがないどころか、今もなお現実味を帯びて迫ってくる。

ドラマの後半の焦点は、主人公の医療ミスを巡る裁判で、医師側が病院ぐるみで記録を改ざんして偽証する一方、病院に逆らって原告側に協力した医師は職を追われていく。最近、そのような医療事故のニュースが絶えず、あまりにも日常的な風景になりすぎて、不思議とも思えないのが恐ろしいほどだ。「あれはドラマの中でのこと」と笑ってすまされないのが、医療界の悲しい現実のようだ。

山崎さんがこの小説を書き始めたのは1963年のことだ。その取材・執筆は、大変な困難を極めたようだ。医事紛争で、病院側がもし医学知識・ウソで固めた証言者・医学専門家・法廷戦術をズラリと並べて対抗したら、患者の側はなかなか太刀打ち出来ない。当時、医事紛争を扱った弁護士は少なく、患者側が勝訴することなどは極めてまれだった。

原作は二部に分かれている。一部は原告患者側敗訴で終わり、本来はここで完結するところだった。だが、多くの読者から、「小説といえども、社会的反響を考えて、作者はもっと社会的責任をもった結末にすべきだ」という声が寄せられ、1年半後、山崎さんは続編の執筆にかかった。二審でついに患者側が勝訴し、主人公の医師は上告するが、裁判の決着を見ずにがんによる死に至るという、その結末を重厚に描いている。

それから40年。このドラマが最終回を迎えた3月下旬、東京地裁で東京女子医大の医師に有罪判決が出た。心臓手術ミスで01年3月、小学6年生の平柳明香さんが死亡した事件で、同僚の医療ミスを隠すためにカルテ類を改ざんした医師が証拠隠滅罪に問われた。

「ミス隠しはミスよりも重い」。明香さんの父・利明さんは「医師に裏切られ、娘が亡くなった原因も分からない」という二次被害の深刻さを訴えていた。ミスは技術的な問題だが、それを隠せば、再発防止を遅らせるだけでなく、医師の人間性にかかわる倫理的な問題となる。判決は「原因だけでも知りたいと切望していた遺族の願いを踏みにじった」と厳しく批判したが、ミス隠しは肉親の死で大きな痛手を受けた遺族の心を、更にメスでえぐる行為だ。

医療機関による診断技術や治療成績に大きな差が生じ、「いい病院ランキング」の記事が雑誌で目立ち、医療機関の「格付け」への関心が高まっている。だが、経営が良さそうな病院でも、そこで働いている医師がいいとは限らない。厚生労働省は4月から、難度の高い手術を行う病院に実施件数の公開を義務付けたが、患者が知りたい情報はほとんど公開されていない。今後、医師の適性をチェックし、カルテ開示など患者側の苦情を受け付ける公的機関の設置も進めて欲しい。

医療に何が出来て、何が出来ないのか。医療は万能ではなく、限界があるのも確かだ。その時、医師もまた、患者と同じ人間であることに直面せざるを得ない。がんの患者や経験者の悩みは、再発の不安など「心の問題」が占める割合が、症状や後遺症など身体的な悩みの3倍以上もあることが、厚生労働省の全国調査で分かっている。「医師に相談したいが、忙しそうで言い出せない」「医師から温かい言葉をかけて欲しい」など患者の不満も出ていた。治療法が進歩する一方で、患者の心のケアがなおざりにされていた。医療不信が高まる中で、医師と患者とのコミュニケーションこそがより求められている。

ドラマの最後、がんの末期患者に初めて告知をすることになった医師が悩むシーンが印象に残る。抗ガン剤での延命を勧めるべきかどうか。その相談を受けた別の医師は言う。「自分にも答えられない。答えは患者に教わるしかない」と。数日後、がんを告知するが、再発を知った患者は動揺し、説明を聞こうとしない。それでも医師は、辛抱強く対話を続け、患者は別れ際、必死に話をした医師に礼を述べる。患者と率直に向き合う姿勢、その「誠実さ」こそ今、最も大切なことなのかも知れない。

「教えるとは、希望を語ること　学ぶとは、誠実を胸に刻むこと」。

教育を巡ってよく引用されるフランスの詩人・アラゴンの言葉がふと浮かんだ。医療やがん告知を巡っても、人間への信頼と希望を語り、誠実に学ぶことからすべては始まるのではないか。